

閲覧ニュース

29号

1981. 1

☆後期試験に備えて

1) 開館時間について

平日；9時から6時（1/8～2/2）

土曜；9時から1時

但し1/24(土)は3時まで開館

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期には、一部特定の図書に利用が集中します。このため、予約の多いものになり、オーバーナイト貸出、三日貸出等の措置をとりますので御承知下さい。

3) その他の注意事項!!!!!!

★カバン・袋類は必ずロッカーに入れてから入館すること。

★書架へ入る際の持込みは禁止です。

★館内での喫煙、飲食、また私語は固く禁じています。

春休み中の貸出と開館について

後期試験が終了しますと春休みに入ります。例年、春の長期貸出の希望がありますが、①春休み中、当館は平常開館していること、②二年次への進級では各学部分散してしまって図書の返却にトラブルが多いこと等の理由で長期の貸出はしておりません。平常どおりの貸出しになりますので御承知下さい。

なお、春休み中の開館時間は平日は9時～5時、土曜日は午後1時までです。2/14・3/20は入試準備の為、閉館します。掲示に御注意下さい。

<推薦図書>

(S5 5.1 2月～S5 6.1月整理分)

- | | | | |
|---------------|------------------------|----------------------|----------------|
| オットー・ハーン自伝 | (289.3/H14) | O・Hahn 著、山崎和夫訳、1977, | みずす書房 |
| ニュルンベルク裁判 | (329.67/Ma 64) | W・Maser 著、西義之訳 | 1979.TBSブリタニカ |
| 女性の権利の擁護 上・下 | (367.8/W85/1-2) | M・ウルストンクラフト著 | 武井武夫訳 |
| | | 1979, | 清水書院 |
| 新電磁気学 上・下 | (427/I26/1-2) | 飯田修一著 | 1975, 丸善 |
| 食 味 | (596.04/Ts 41) | 辻嘉一著 | 1980, 京都PHP研究所 |
| 歴史は生きている | (914.6/Mu 43) | 村上元三著 | 1976, ゆまにて出版 |
| 歴史・遠いあし音 | (914.6/O96) | 尾崎秀樹著 | 1977, ゆまにて出版 |
| 石原吉郎全集 全3巻 | (918.68/I74/1-3) | 石原吉郎著 | 1979, 花神社 |
| 中原中也全集 全5巻・別巻 | (918.68/N33/1-5, Sup.) | 中原中也著 | 1979, 角川書店 |

カントの生涯（Ⅱ）

山 根 和 平

大学に入学したといっても、カントの家庭が裕福になったわけではありません。カントが、まだコレギウムに在学中1737年に母親がなくなったのですが、その葬儀も市の救済費を支給してもらって、やっとすませたような状態でした。まして、カントが大学を卒業する1746年には、父親もなくなってしまいましたので、カントは4人の弟妹をかかえて、生活のために働かなければなりません。カントがケーニヒスベルクの町を離れるのは、八十年にわたる生涯のなかで、このとき一回だけです。家庭教師として地方の小村に出むいていくのですが、のちに、このころのことを思いだして、みずから「いちばんいやな夢」であったと述べています。ただ、この家庭教師の時期に、あとで有名になるカントの社交術に磨き^{みが}がかけられたことは十分に考えられるところでしょう。

1755年に、カントは学位論文を大学に提出して修士の学位を得、ケーニヒスベルク大学の私講師になります。就職論文は二通で、一通は当時の習慣によってラテン語で書かれ、「形而上学的認識の第一原理の新たな解明」と題され、他の一通はドイツ語で書かれ、「一般自然史と天体の理論—全宇宙の体制と力学的起原についての、ニュートンの原理による試論」と題されています。のちにカント＝ラプラス説の名で知られる宇宙発生論の展開されている論文です。これ以後1770年までカントは私講師をつとめ、たくさんの論文を書きました。そのなかには、「美と崇高との感情についての考察」（1764年）や「視霊者の夢」（1766年）のように、重要な論文もいくつか含まれていますが、その内容は私たちが普通カント哲学とか批判哲学とかいう名前で考えている哲学とは大きなへだたりがあります。この時期のカントの哲学は、一括して「前批判期」の哲学とよばれていますが、

これは、のちの批判期以後の哲学とは区別して考えなければなりません。

カントは1770年に、ケーニヒスベルク大学の論理学・形而上学担当教授になりますが、その時の就職論文「感性的世界と知性的世界との形式と原理」でさえも、前批判期の論文に属しています。けれども、1772年にカントはカイザーリング伯爵との交際をはじめ、伯爵の蔵書を自由に利用できるようになりました。カントがヒュームの著作、とくに『人性論』に接して、大きな衝撃を受けたのは、このころのことだと言われています。それから十年ちかくたって、『純粋理性批判』（第1版）が1781年に出版されます。おそらく、カントは、この十年の間に、自分の哲学について全体的、徹底的な検討をおこなったのでしょう。こうした長い内省の結果が、『純粋理性批判』のあの驚くべき内容に凝集したと言ってよいと思います。このことは、カントがみずから「コペルニクスの転回」と称した認識に対する革新的な構想のことを考えてみるだけで十分に理解されるでしょう。

これ以後のカント哲学は「批判期」の哲学と言われてよいと思いますが、われわれがカント哲学とか批判哲学とかいう名称で考えている哲学が、『純粋理性批判』第1版によって始められたとは言えても、これで確立されたと考えられるわけにはいきません。カント哲学の重要な諸要素は、まだ十分に確立されておらず、カントは『純粋理性批判』第1版をさらに検討して基本的な点で多くの訂正をおこなっています。批判哲学は十分に成熟しておらず、このことは、1783年に出版された『プロレゴメナ』にも、また、『人倫の形而上学の基礎づけ』（1785年出版）や『自然学の形而上学的基礎』（1786年出版）についても言えるのではないのでしょうか。

ところが、1787年になると、『純粹理性批判』の第2版が出版され、つづいて1788年に『実践理性批判』、1790年に『判断力批判』が出版されます。この三つの著作は、しばしば一括して、「三批判書」と言われますが、このころになって、ようやくカント哲学は成熟し、その全体の構造を明らかにしたのです。二十歳ごろに『人性論』の基本的な構想をまとめ、その哲学を確立したヒュームにくらべると、カントは大器晩成型の人といえるかもしれません。『判断力批判』が出版された1790年に、カントはすでに六十六歳になっていました。

ここで、もう一度私講師時代をふりかえってみますと、家庭教師は止めたものの、私講師という地位のもつ経済的な不安定さのために、ずいぶん厳しい研究生活を強いられていたようです。私講師としては、一般の社会人のために開放されている講座をうけもって、聴講者の数を増やす努力もしていますし、1766年から1772年までは城内図書館の副司書というアルバイトもしています。経済的に安定するのは、やはり、1770年に大学教授になってからでしょう。1784年には、長年の借家ずまいからぬけだし、自分の持ち家に住めるようになります。大学内の地位も安定し、1776年には文学部長、1786年には一期だけ学長をつとめ、1788年には学長に再任されています。

研究の面でも生活の面でも、やっと落ちついた晩年をすごせる条件がととのい、1790年以後のカントは静かな研究生活をおくることになるはずでした。この最後の時期の重要な著作は、1797年に刊行される『人倫の形而上学』ですが、同時にこの時期には、「単なる理性の限界内における宗教」（1793年）とか「永遠の平和のために」（1795年）のような重要な論文をいくつか書いています。けれども、皮肉なことに、まさに、この「単なる理性の限界内における宗教」という論文（正確に言えば、三つの論文を集めたもの）が、カントの晩年をかき乱

す原因の一つとなるのです。

1794年に、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世は、神学者ウェルナーの名前で、カントに対する問責状を出します。問責の意図は、キリスト教に関するカントの不穏当な学説を改めよという点にあるのですが、その底流には単に教会の関係者だけでなく、プロイセンの比較的保守的な層の人たちが、同様に保守的な国王をかついで、カントを黙らせようという意図があったようです。

両親の影響を受けて、幼いときから敬虔なキリスト者として生きてきたカントにとって、この問責状の一件は、まったく意外なことであつたにちがいません。『純粹理性批判』の執筆の目的の一つは、信仰と理性、神学と哲学を分離することによって、啓蒙主義の流れからキリスト教を救うことであつたのです。カントは、さっそく、弁明書を書き、以後宗教と神学についての一切の講義活動、執筆活動をしないと国王に誓います。このカントの態度が、今度は革新派の人たちから、不当な態度として攻撃されることになりました。ことの善悪は別として、私たちは、すでに七十歳になったカントが、このような論争の渦中に巻きこまれたということに、深い同情の念をおぼえずにはいられません。

しかし、カントといえども、ただ国王と妥協するというような単純な行動をとったわけではありません。そのことは、1797年にフリードリヒ2世が没して、フリードリヒ3世が即位してから、翌1798年に、カントが「諸学部の争い」を書いて、その序文に、先王の問責状と、それに対する自分の弁明書を公表したという事実からもうかがうことができます。

この「諸学部の争い」は、カントの生前に発表された最後の論文です。1800年以後は老衰が進み、著作は行なわれなくなりました。そのかわり、このころからカントが大学でおこなった講義のノートが弟子たちの手で刊行され始めます。『人間学』（1797年）、『論理学』（

1800年)、『自然地理学』(1802年)などの著作です。1804年2月12日にカントは八十才でなくなり、遺体は大学墓地に埋葬されました。水でうすめたブドウ酒を飲んで、「これはよい」と言ったのが最後の言葉と伝えられています。カントの生涯と学説をふりかえってみるとき、この言葉は何かを象徴しているようにもみえます。

この小文を読んでくださった皆さんは、カントに対してどんな気持ちをいだかれたでしょうか。もしカントについて何か読んでみたいという人がいたら、解説よりもまずカント自身の著作をお読みになることをおすすめしたいと思います。教養図書館では、カントの著書・論文・講義ノートのほとんどすべてを、日本語で読むことができます(理想社版『カント全集』(134.21/Ka59k/v.1-v.17))。しかし、そうは言っても、『純粹理性批判』のような主著を、いきなり読み始めることは、あなたをカントから遠ざけるだけで、何の益もないことです。最初には講義ノートの中の『人間学』や『自然地理学』をとりあげてお読みになるほうがよいと思います。とくに『自然地理学』は、世界各地の動物

や人間について、くわしい記述がありますので、読み物としてもおもしろいでしょう。たとえば、その中でカントが日本人について述べていることは、当否は別として、当時のヨーロッパ人の日本観を示す一つの資料ともなります。これではもの足りないと思われる人は、「永遠の平和のために」のような論文をお読みになるとよいと思います。もっと自信のある人は『プロレゴメナ』を、全部分ろうとしないで、だいたいの筋だけでも理解することを目指してください。

カントを解説した本は多くありますが、ただ一つだけ選ぶとすれば、中央公論社版『世界の名著32 カント』(080/Se22c/32)の巻頭にある野田又夫先生の解説をあげたいと思います。たいへん分かりやすい解説です。この小文を執筆するに当たっても、同書の解説および年表から、多くの正確な資料を使わせていただきました。この小文をお読みになって、さらにくわしくカントの生涯と学説について知りたいと思われる方は、ぜひ、本書をお読みいただきたいと思います。(哲学)

文化の窓口

木村孝康

本棚という本棚の総べてにカーテンをかけ、その端をめくりながら読みたい本を探す。開高健氏は室内旅行と称して、このような気のきいた読書生活をなさっているらしい。

この宝探しのような室内旅行は氏が未だ少年の心を失わず、キラキラ輝く瞳を持っている一つの証しと言えるだろう。この話を聞いて思い出したのが、我が水産学部の図書館である。と言っても書架の一つ一つにカーテンがかかっている訳ではない。めくるのはカーテンではなく図書目録カードなのだ。

閉架式図書館にもそれなりの利点があるのだ

ろう。然し使う側からすれば、痒い所に手が届かないといった感がある。三陸のように文化的に孤立してしまっている所でのこのカードめくりは、一層に歯痒く、砂をかむようで虚しい。

三陸の地にある水産学部が、文化的に孤立してしまっているなどと書くと、「そんな事はない。産業との密接な関わりがあるだろう」と叱られてしまいそうだが、大方の学生は文化的な刺激の少なさに、そう感じているはずだ。

文化の孤立なのだから質の違いの問題であろう。いくら三陸が地の果てにあろうとも、そこに人間が住む以上はそれなりの文化があるのは

当然だ。特に三陸の場合は歴史も深く、その地理的な特異性から、個性的な文化が育まれている。

その土中に^{やじり}ねむる鏝は大古の歴史を物語るし、沖合で押し合い、もつれ合う潮流は異質な文化を漂着させる偶然を、幾度も生み出した事だろう。

そんな味わい深い文化が存在するにも関わらず、刺激欠乏症に悩むのは、その文化と接する機会つまり文化の窓口となるものが、日常見あたらなからだろう。

大学での最も身近な文化の窓口と言え、図書館であろうが、閉じられた世界でのカードめぐりでは生きた文化は探し出せない。二つの文化は平行線をたどり、宝探しは空振りに終わってしまう。

ところが、三陸のキャンパスの中にも一カ所だけ、水産学部の文化と三陸の文化とが交差する窓口があったのだ。開高健氏がカーテンをめくり、一冊の書物を見出すように、私も一つの

ドアを開き、それを発見した。宝探しは大成功といった所だ。

その窓口には一人の御老人が立っておられ、こちらが時間のけじめさえつけば、いつでも心を開いて下さる。

御老人と言っても六十代半ばで、日に焼けた肌はまだ若々しい。その御老人Nさんは、大学の宿直さんであり、一日おきに大学の夜を警備しておられる。つまり文化の窓口は宿直室に存在したのだ。

この部屋で、私は本当に多くの事を学んだ。Nさんは尊敬すべき文化人で、知識欲も旺盛だ。郷土史に関しては、やたらな本を読むよりはよっぽどためになる。又、三陸の郷土芸能である念仏けんばいの貴重な担い手でもある。

私は、図書館に陳列されているカードに味気なさを感じた時、宿直室という文化の窓口へ行き、大古の潮のうねりを聞く旅行の、切符を得る事にしている。 (水産学部 2年)

教養部図書館の思い出 ―― <八角文庫>のことなど ――

佐 伯 修

相模時代、よく教養図書館の書庫ですごした。そこは普段からあまり人の気配がなく、外の喧噪から隔絶されていた。棚から棚へとあてもなく拾い読みをしてあるくうちに、時の経つのを忘れてしまうことが度々あった。そんな時、たまに、かすかな毒気にあてられたように頭がくらくらするのを覚えた。それは、幼い時分ひとり遊びに熱中していてふと感じた不安のようなものに似ていた。

書庫には、長い間忘れ去られているかのように、借り手もなく、埃を被った書物があった。一見、時代遅れになったような、もう役に立たなくなったような本の中に、おもわぬ見つけものをする事があったから、私はそれらの古書に好んで接した。扉に「八角文庫」の印のある書物たちとの出会いもそうした中にあった。

「八角文庫」はじつにさまざまな分野に渡っ

ていた。物理、化学、数学、天文学、科学史や科学思想、はたまた文学、思想、歴史等々。アインシュタインもグイルもラッセルもエンゲルスも漱石も柳田國男もその中にあり、より多くの未知の人々の著作があった。私は、「八角文庫」の由来に興味をもち、教養図書館員に訊いてみたが、教養部のできる以前から大学にあること、もとは個人の蔵書であつたらしいこと、の他はわからず、詳しいことを知っている人はここにはいないとのことであった。

昭和13年刊の高木貞治『解析概論』初版の表紙裏にしるされていた

東大 理学部化学科 八角正士

という署名だけが、「八角文庫」の元所有者について、私の知っている全てである。

さまざまな分野にわたるそれらの書物すべてが読破されたかどうかはわからないし、また、

フォン・ゼークトやヘンリー・ウィリアムスの著作の何に魅かれたのかもよくわからぬ。ただ、八角という人は、もしかしたらルネサンス人のような、自然学と人文学との幅広い結合をめざしていたのかもしれない、と思う。一見とりとめないような「八角文庫」の書目はかなりえらびぬかれたもののようだし、若い頃からの蔵書とおもわれるものには、愛蔵され、またよく使い込まれた形跡があって、そこにひとつの青春が垣間見られた、といってもいい。

例えばマキアベリの『マンドラゴラ』、ワーグナーの『ベクトオヴェンまゐり』、鄭振鐸の『書物を焼く』の記』は何れも小さなあまり目立たない書物だったが、私がそれらから受けた感慨は大きかった。また、八角氏の数学への関心は可成であったらしく、純粋数学に関する書物や数学啓蒙書で「八角文庫」の印のあるものかなりあった。私は時たま、その中のやさしい小冊子を選んで手にした。数学や理論化学は、人間の感傷や迷いや激情を拒絶したから、精神的に消耗したとき、それらに向うことは不思議と心の救いになった。

書庫の中は書物の発散する妖気に充ちていて、たしかにそこは私の日常生活における＜魔界＞のごときものだった。私は毒にあてられることを承知で＜魔界＞に分け入った。そして都心の自宅との間の通学途中で本を読んでいた。しかし、活字よりも＜現実＞の方がどんな些細なことであれ重大だった。

教養部の周囲はまだ相模野の広野の面影を残していたが、とりわけ図書館の閲覧室から見る丹沢の夕暮れの景色が好きだった。おもえば、「八角文庫」をはじめとする書庫の本たちも、窓から眺める丹沢の風景も、あの頃、相模で、いわば実生活の対岸から私を支えてくれていた。そのような意味でも教養部の図書館はたしかにかけがえのない場所であった。（水産学部2年）

注：八角正士先生は東大の化学の先生で、本学で講義をなさったことはありませんが、本学の教員に先生のお弟子が大勢いらっしゃる御縁で、御逝去の後、蔵書を御寄贈頂いたのが八角文庫です。主として白金図書館と教養図書館に収められています。

資料紹介

..... 旅の本あれこれ

旅行ガイドブックや、旅に関するエッセイ紀行文を中心にとりあげてみました。但し、地理学、人文地理学、地誌学などの学術書や研究書、専門書は除いてあります。出版年は1960年以降の比較的新しいものです。

- 地図、地名事典は除く。
- ハイキング、登山技術書は除く。
- 排列は請求記号順です。

これが新しい世界だ 全32巻

国際情報社 1965-67

オラン・ウータンの島；ボルネオ探訪記

岡野恒也著 紀伊国屋書店 1965

歴史のある街

大竹新助著 人物往来社 1963

山・人・本

島田巽著

茗溪社

1976

歴史のある寺

奈良本辰也著

人物往来社

1963

日本の旅路；その詩と真実

岡田喜秋著

日本経済新聞社

1964

ほろびゆく大和

寺尾勇著

大阪、創元社

1968

エスベラント国周遊記

- 出口京太郎著 朝日新聞社 1965
 アルプス—岩と氷の王国—
 近藤等著 小学館 1975
 世界の旅 全20巻
 座右宝刊行会編 河出書房新社 1969
 地中海の旅—歴史と伝説の誘い—
 週刊朝日編集部編 朝日ソノラマ 1975
 世界船旅入門—もうひとつの旅立ち—
 朝日新聞社編 1977
 世界百名山
 深田久弥著 新潮社 1975
 歴史家のひとり旅
 堀米庸三著 新潮社 1974
 北緯79度—北欧・西欧紀行—
 飯塚浩二著 筑摩書房 1980
 働きながら海外旅行
 海外旅行研究会 青年書館 1976
 マグレブ紀行
 川田順造著 中央公論社 1971
 国際情報事典—海外旅行のために—
 アルク (別冊The English Journal) 1979
 わたしの山旅
 楨有恒著 岩波書店 1968
 ヨーロッパの都市と生活
 増田四郎著 筑摩書房 1975
 ある日のヨーロッパ
 松前達郎著 東海大学出版会 1975
 海外旅行ABC
 三上操著 社会思想社 1965
 キャンプ・ハイキング
 中村謙著 二見書房 1965
 歴史の旅情
 奈良本辰也著 河出書房新社 1963
 旅程と費用 日本交通公社編 1968
 外国旅行案内 全4冊 1972
 日本交通公社 ~ 73
 何でも見てやろう
 小田実著 河出書房新社 1973
 遙かなヨーロッパ
 柴田俊治著 朝日新聞社 1977
 北壁の青春
 高田光政著 あかね書房 1968
 反文明の島—りゅうきゅうねしあ紀行—
 辰濃和男著 朝日新聞社 1977

四季の行楽

- 戸塚文子著 大泉書店 1963
 ナイルとニジェールの間に
 A. J. トインビー著 氷川玲二訳 新潮社 1967
 日本ユース・ホステルの旅
 日本ユース・ホステル協会編 秋元書房 1971
 日本の山 山と溪谷社編 1975
 世界旅行地図 帝国書院 1975
 観光バスの行かない……
 岡部伊都子著 新潮社 1969
 アルパインガイド 1巻— 山と溪谷社
 ブルー・ガイドブックス 実業之日本社
 ふるさとの旅路—日本の叙情—全14巻、別巻
 井上靖、串田孫一監修 趣味と生活社 1976
 観光と旅；郷土資料事典 全47冊
 人文社観光と旅編集部編 人文社 1975
 日本山岳名著全集 全12巻
 あかね書房 1966
 カラー旅 全14巻
 主婦と生活社編 1968
 ホステル仲間—青春の詩の旅—
 秋谷豊著 朝日新聞社 1968
 日本誌—日本の歴史と紀行—上・下巻
 エンゲルベルト・ケンペル著 今井正訳
 霞ヶ関出版 1973
 うちなる山々
 中野孝次著 東京新聞出版局 1979
 秘境への旅 大阪読売新聞社文化部編
 大阪 創元社 1968
 山に憑かれて
 白簾史朗著 成美堂出版 1978
 日本の秘境
 柞木田竜善著 読売新聞社 1968
 会津ふるさと散歩
 会津郷土研究会編 1978
 利根川図志
 赤松宗旦著 名著刊行会 1967
 東京の秘境→秋川溪谷
 甲野勇著 校倉書房 1968
 東京の自然史
 貝塚爽平著 紀伊国屋 1969
 失われゆく白山の自然
 久保信一著 金沢、北国出版社 1975
 よみがえる旅
 信濃毎日新聞社編 長野、信濃毎日新聞社 1976

京都心理学散歩

- 安西二郎著 東京書籍 1977
 京都（ガイドシリーズ 24）日本交通公社 1969
 洛中生息
 杉本秀太郎著 みすず書房 1976
 続・洛中生息
 杉本秀太郎著 “ 1979
 あるく奈良・大和路
 武部宏著 新声社 1975
 奈良散歩ー落日の古都ー
 寺尾勇著 創元社 1968
 ユース・ホステル九州・沖縄の旅
 日本ユース・ホステル協会 秋元書房 1968
 中央アジア探検史
 深田久弥著 白水社 1971
 中国人の人間革命
 池田大作著 毎日新聞社 1975
 今日の韓国 1977-1978
 中国旅行百科 ナジュール編
 高市恵之助、山田友二編訳 筑摩書房 1977
 台湾の美
 山岡荘八等著 おりじん書房 1974
 ヒマラヤの高峰 1-3
 深田久弥著 望月達夫等編 1973
 白水社 ~ 74
 エヴェレスト登頂記
 J・R・アルマン著 丹部節雄訳
 ベースボール・マガジン社 1976
 アフガニスタンの農村から
 大野盛雄著 岩波書店 1971
 パミールーシルクロードの城塞
 田村俊介著 ベースボール・マガジン社 1976
 中央アジアの高峰
 原真、田村俊介共編
 ベースボール・マガジン社 1978
 最新・鉄道の旅ーヨーロッパ周遊ー
 山本克彦著 三修社 1977
 ヨーロッパやきもの旅行
 安岡章太郎著 平凡社 1976
 マルクス・エンゲルス紀行 新訂版
 小島恒久著 京都、法律文化社 1979
 ヨーロッパ縦横ひとり旅
 小山内宏著 ダイアモンド社 1977
 ヨーロッパ民宿の旅
 杉田房子著 三修社 1977

西欧逍遙

- 渡辺一民著 講談社 1978
 イギリスの国・イギリスの人
 杉山忠平著 未来社 1970
 ドイツ城とワインの旅
 井上宗和著 三修社 1977
 スイスの旅ーアルプス・湖・街々
 本田静哉著 三修社 1977
 フランス城とワインの旅
 井上宗和著 三修社 1976
 セーヌ左岸ーパリの文学と芸術を歩く
 尾崎昭美著 京都 駸々堂出版 1976
 パリの街角ー文学散歩
 佐藤昌著 三修社 1976
 オランダ・ベルギー・ルクセンブルグーベネルクスの旅
 猪瀬脩一著 三修社 1977
 七色の風船ーロシア三人旅ー
 進藤純孝著 集英社 1976
 遙かなる北欧に
 大東省三著 三修社 1979
 青ナイル
 A・ムアベット著 篠田一士訳
 筑摩書房 1976
 白ナイルーナイル水源の秘密ー
 A・Moorehead 著 篠田一士訳
 筑摩書房 1975
 カナダの旅ーアメリカ西部からカナダへー
 佐野文哉著 鷹書房 1976
 アメリカ 200 ; 建国 200 年祭公式ガイド
 講談社 1976
 ぼくのニューヨーク地図ができるまで
 植草甚一著 晶文社 1977
 昨日の旅
 清水幾太郎著 文芸春秋 1977
 現代の探検 7 ; 特集さがす
 山と溪谷社編 山と溪谷社 1972
 素晴らしき地球ー冒険の記録ー
 磯貝浩編 山と溪谷社 1974
 海洋の道ー考古学的冒険ー
 トール・ヘイエルダール著
 関楠生訳 白水社 1976
 コン・ティキ号探検記
 トール・ヘイエルダール著
 水口志計夫訳 筑摩書房 1975

ひとり旅の楽しみ（中公新書451）
高坂知英著 中央公論社 1977
ひとり旅の知恵（中公新書501）
高坂知英著 中央公論社 1978
旅のたのしさ（講談社現代新書536）
山本 脩著 講談社 1979
アルプス登攀記 上下
E・ウインパー著
浦松佐美太郎訳 岩波書店 1936

松方三郎エッセー集 1～5 1975
築地書館 ～ 76
私の北壁 マッターホルン
今井通子著 朝日新聞社 1968
続・私の北壁 アイガー、グランド・ジョラス
今井通子著 朝日新聞社 1972
ヨーロッパの名峰 美しきアルプス
小森康行著 矢来書院 1976

旅と旅の本

目 黒 靖 子

現代の旅行は摩訶不思議である。特に何とかバックとかツアーと称する団体旅行はその最たるものである。先ず旅行代理店の指示する集合場所に赴くと添乗員と称する係員が待っている。そこで彼に会えたらもうそれから先は彼の指示に従っていればそれだけでその旅行は終わってしまう。これは極端な表現だが、又、事実である。今、パスポートさえ持っていれば、明日にでも出発するツアーに参加が可能である。仮にも外国へ行くのであるから、彼の地の言葉が分らなくては等という心配は無用である。全て添乗員に任せる。いやしくもそれが出来るので生業としている添乗員氏よりも上手に英語を話そうものなら、彼に恥をかかせる事になるとものの本にも在った。だがこれでは時間を使って空間を

移動しているに過ぎないのではないと思う。旅とは興味の対象、あるいは目的が彼の地に在るので成りたつものである。ドイツもフランスも向こうからこちらに来てくれない。必然的にこちらから出かけて行くのが旅行という事になる。やはり社会慣習や言語が異なる所へ出かけて行くのだから、少しく目的地なり通過地の知識が有った方がより楽しいという事になる。旅の案内書は近い将来旅行しようとする時、あるいは旅行中に役に立つがばく然と何時か旅に出たいと考えて居る時は旅行書と限らず、図書館の資料の全てが何らかの役に立つように思われる。旅行に出ようとする人の動機や機会が一樣ではないからである。（教養図書館）

1980. 4月～12月 貸出統計

	単 行 本			雑 誌			開 館 日 数
	学 生	教職員	計	学 生	教職員	計	
4月	598	87	685冊	40	21	61	24日
5月	1,222	128	1,350	41	41	82	23日
6月	1,297	129	1,426	49	33	82	25日
7月	1,289	135	1,424	38	23	61	27日
8月	87	55	142	12	25	37	20日
9月	536	105	641	49	34	83	24日
10月	1,040	101	1,141	56	35	91	25日
11月	974	81	1,055	38	29	67	20日
12月	938	52	990	40	21	61	21日
計	7,981	873	8,854	363	262	625	709日

図書館業務日誌（S 5 5.4～S 5 6.1）

月 日	図書館関係日誌	閉館日	閉 館 事 由
4. 1	小野新館長就任	4.1	9.00～10.30 館内整理
4. 6	入学式	4.5	9.00～13.00 入学式準備
4. 5～4. 9	教養図書館オリエンテーション	5.1	9.00～10.30 館内整理
5.2 3	館長会議	5.17～5.19	体 育 祭
5.2 4	新旧館長歓送迎会	6.2	9.00～10.30 館内整理
6.1 0	図書館運営委員会	7.1	9.00～10.30 館内整理
6.2 8～7.1 2	土曜開館延長	8.1	9.00～10.30 館内整理
7.1 1	閲覧ニュース発行（第27号）	9.1	9.00～10.30 館内整理
7. 8	図書館運営委員会	10.1	9.00～10.30 館内整理
7.1 7～9.1 8	夏期長期貸出	11.1	9.00～10.30 館内整理
10. 7	図書館運営委員会	11.8～11.10	北 里 祭
10.1 8	教養部球技大会	12～1	9.00～10.30 館内整理
11. 5	北研創立記念日	12.25～1.5	年 末 年 始
11. 8～11.10	北里祭		
11.1 8	図書館運営委員会		
12.1 0	閲覧ニュース発行（第28号）		
12.1 0～11.10	冬期長期貸出		
1.2 2	閲覧ニュース発行（第29号）		

***** 編 集 後 記 *****

◆後期試験の終了とともに、学生の皆様には4月までの長い休暇がまっていますね。既に計画をお持ちかもしれませんが、今回は旅の本を紹介してみたいとP6～9にまとめてみました。旅のプランの参考に、また未知の世界への読書の友にどうぞ利用なさってください。◆また、今回は、水産大学の、学生お二人からの寄稿を掲載しました。一年次によくこの教養図書館を利用され、今は少しの距離をおき図書館をどのように眺められているか大変興味深く思いました。一年生の皆様にも新鮮な刺激を与えてくれるでしょう。◆前号からシリーズで山根先生に執筆いただいております。日頃あまりなじみのない哲学者が我々の前に登場し、以降どのように展開されていくのか先生の筆さばきに期待したいところです。◆一年生の皆様にとっては、この号が教養部時代最後のニュースとなるでしょう。各学部へ進学されても教養図書館をぜひご利用下さい。またお会いする日まで、お元気で、さようなら。

閲覧ニュース29号

1981. 1. 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 小 野 健 一